

森の自由人 121

狸泥舟

神戸異人館めぐり

六甲山中の布引の滝から転げるように下ると、新神戸駅に突き当たる。その下を潜って右手に進むと、北野異人館街は近い。まあ神戸の代名詞のようなスポットである。旅行案内など見ない行き当たりばったりなので、異人館が何ものかもよくわからない。帰ってから調べてみると、20軒ばかりあるようだ。入館料は400～1,050円とまちまちだが、グループを組んで割安になる共通券を発行しているところがある。私と妻は、たまたま異人館街の最上部にある「坂の上の異人館」に行ったところ、ここは7軒ある「うろこグループ」の最初の1軒で、お得ですよと言われるままに3,300円の共通券を購入した。



写真 1 坂の上の異人館 狛犬

ある。やりたい人は大いにやるべきだ。

「坂の上の異人館」は中国領事館だったそうで、西洋風の他館とは雰囲気違って東洋的だ。写真の狛犬の門はパワースポットだそうだが、後ろ向きではご利益ないかも。

次の「北野外国人倶楽部」では、50がらみの2人連れの女性客に出会った。それがいかにもエキゾチックなこの洋館に似合いの服装である。結構はしゃぎながら、明るく楽しんでいる。なりきっているのだ。何とも素晴らしいことで、気負わず人生を謳歌している。すると私た

ご案内の地図と手帳を渡された。手帳には7軒の異人館の記念スタンプを押してくださいと言う。全部集めると何かくれるんですか？と問うたが、何もくれないそうだ。古くは四国八十八か所の御朱印、この頃は日本百名城の御朱印もあるようで、日本人はスタンプラリーが大好きだ。もうこの歳になるとこんなもの集めても、死んでから子供たちに邪魔ものにされるだけだろうから、私はやらない。でも収集が生き甲斐になって健康で長生きできるなら結構な話で



写真 2 北野外国人倶楽部

ち夫婦に声を掛けてきた。せっかくだから、写真を撮ってあげますよと言うのだ。ええっと一瞬面くらったが、言われるままに笑顔を拵えて夫婦して洋室の画面に収まった。ほっこりするひと時だった。残念ですが、この写真は割愛します。

うろこの家はこのグループの代表である。洋館の外壁が 4,000 枚の天然石スレートで覆われていて鱗に見えるのだ。六甲山系の山際、異人館街の最上部にあって街並みから港が見下ろせる絶好の位置にある。



写真 3 うろこの家



写真 4 かつてのうろこの家

中はギャラリーになっていて絵画が掛けられているが、その中に 1 枚昔の写真があった。こういうのを見るとつい商売気が出てしまう。うろこの家の背後の森に注目して欲しい。

現在は鬱蒼と常緑広葉樹が繁っているが、昔はマツ林で樹間から空が透けて見える。六甲山系も里山的な林相だったのである。

過度な森林利用を繰り返したので土地が瘠せ、瘠せ地に強いマツが多かったのだ。これが里山の典型的な形態の 1 つだが、化石燃料や化学肥料の普及によって、里山が利用されなくなると次第に地力が回復し、原植生に近い常緑広葉樹が復活してマツが衰弱する。人は森林再生だとか言って、いたずらに手を入れたがるが、日本の自然にとって人間のお世話は有難迷惑、森は自らしっかりと緑を濃くしている。

屋敷の前にイノシシの像がある。このイノシシの子孫たち夜な夜な像の前に集まって、森の復活を^{ことほ}ぎ御先祖様と戯れているのだろう。

こうして異人館街を見学しつつ下り、三ノ宮で旅の最後を締めて、翌日帰京した。

とんでもないおまけ

こうしてめでたく今回の旅も終わったと思っていたら、帰宅して 2 日目、入浴した際のことである。浴室に入った時、首の付け根でぬるっとしたものに手が触れた。まるで首からナメコが生えたような感じだった。ええっ!!

こりゃ、ポリープだ。皮膚癌に違いない。気が動転してしまい、良し悪しも考えず、思い切って引っ張った。血がどぼっと出るだろうと思ったが、何も出ない。ぽっとり褐色がかかったナメコの傘のようなものが風呂の蓋の上に落ちた。

大声で妻を呼んで、首の付け根に残ったであろうナメコの軸と出血具合を見てもらった。

「赤くはなってるけどねえ」

はっきりしないので、ナメコの傘を浴槽の縁において、そのまま入浴を続け、体も洗った。風呂から上がって、ナメコの傘をじっくり観察した。直径は5mmほどで表面に炎上したような凹凸がある。4対の足とヤットコのような口がちょこちょこ動いているではないか。こいつはまだ生きている。ネットで調べてみると明らかに血を吸って膨らんだマダニようだ。



写真 14 私を刺して膨らんだマダニ

マダニの存在は若いころから知っていたが、血を吸った個体は初めて見た。四国山地の笹藪に多く生息していて、藪漕ぎするとよく噛まれる。私は噛まれたことはないが、同僚が噛まれて大騒ぎになった。肌に食い込んだダニを無理矢理抜き取ると口の部分が外れて肌に残るのだ。それが化膿して切開しなければならなくなる。

山中ではすぐに医者に行くことができないので、たばこのヤニ、すなわちニコチン

をつけてやると、口が開いて簡単にとれる。当時は喫煙者が多かったので、この方法が一番良かった。

今回の私の場合は、ダニだと分かっていたらそのまま医者に行ったのだが、皮膚癌だと早とちりして無理矢理引っ張ってしまったのだ。鏡で確かめなかったのも悪かった。しかし、よく見ると口もちょこちょこ動いているようなので、体内には残っていないようだった。



写真 15
吸血前のマダニ
京都市HPから

次の日は木曜日で皮膚科は休診だったので、金曜日に行くことにした。うちから5分ぐらいのところ皮膚科がある。もう90歳近いおじいちゃんだが名医なのだ。変わっているのは夕方5時から診療が始まり、翌朝2時、3時まで続くこともふつうだった。最近は完全予約制になっていると言われたが、看護師にマダニだと事情を話すと、夜中の11時半に来てくれと言う。

さて、もう日付も変わった真夜中、小柄なじいちゃん先生で腰も曲がっているが、名医のオーラが背中から出ている。まだまだ健在だ。早速、ビニール袋に入れたまだ生きているダニを渡し、首の付け根の噛み跡をみせた。ぽつと膨らんで固くなっている。

先生は、電子顕微鏡だろうか、ダニを置いて観察を始めた。壁に大きなモニターがあって、黒々とした円の一部分が映る。月食の時の地球の影のようだ。私はソクラテスか。先生がその円を回していくと、ちょこちょこ動く足が見え始め、やがてヤットコのような口が現れた。先生は「口は体内に残っていないね」と言うと、今度は図鑑を取ってきて、これはタカサゴキララマダニだとページを開いて示す。西日本に多いそうで、どこへ行ったのだと言うから、

3 日前に六甲山に入ったと答えると、六甲山には多いと言った。イノシシ注意の看板を思い出した。イノシシはマダニを運ぶ。看板にマダニ注意も入れて欲しい。

さて、名医の由縁である。経験豊富だからすぐに病名が特定できる。患者に医学書等を見せて説明する。顕微鏡とモニターによる説明もある。とにかく患者が納得できるのだ。変わった症状だと学会報告したいので、写真を撮らせてくれと言う。勉強熱心だ。今回も患部の写真を撮られ、モニターに大写しされたダニも撮影していた。ダニの検体はどうしますと聞かれたので、喜んで進呈した。たぶん欲しかったと思う。

1 週間以内に熱が出たらすぐ来なさい。ダニが媒介するリケッチアによる日本紅斑熱に効く特殊な抗生物質がある。重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、まず心配ないとのことだった。

さて、その後かれこれ1 か月発熱もないから大丈夫だろう。しかし、最近マダニによる感染症での死亡例が多発している。5 月 25 日には広島県呉市で 70 代の女性が日本紅斑熱で、6 月 7 日には香川県三豊市で 60 代の女性が SFTS で、数日前には三重県で SFTS に罹ったネコを治療していた男性獣医師が感染して死亡している。

噛まれても痛みやかゆみを感じないので、そのままダニが体から離れてしまうと、その後熱を出してもダニ感染症を疑わず、手遅れになることがあるので要注意だ。亡くなってから、体を探すとダニの噛み跡が発見されて、はじめてダニ感染症であることが分かるのだ。

まあ、マダニはどこにでもいるし、山野を駆けまわれば噛まれる可能性も大きい。必要以上に懼れることはないが、帰ってからダニが体にとりついていないか確認した方がいいだろう。